深〜く

★小宮地域を知る！ その2

“ぐるっと小宮・周回コース”

はちとび観光★
―特撰―

❶北八王子駅

北八王子工業団地造成に伴い、1959（昭和34）年開設。当初は単式ホーム1面1線の無人駅だったが、1996（平成8）年に八王子〜高麗川間が電化されたことに伴い、橋上駅に改築された。特に駅西側で宅地化が進み、乗降客が増加している。

❷北八王子工業団地

工業団地建設を目的に、昭和30年代から日本住宅公団によって土地の区画整理が進められ、工場建設が始まった。石川町・高倉町にまたがる107haの土地には現在、大企業の工場や物流拠点など30社以上の企業が立地している。

北八王子駅～東海大学八王子病院

❶北八王子駅
❷北八王子工業団地
❸八王子競馬場跡
❹日枝神社
❺東光寺
❻大和田市民センター
❼大和田橋
❽八王子郵便局
❾浅川橋
❿暁橋
⓫名綱神社
⓬水原秋桜子句碑
⓭大善寺
⓮機守（はたがみ）神社
⓯龍谷寺
⓰東海大学八王子病院

❸八王子競馬場跡

大正期、現在の市立2中付近で神社の祭礼の余興として草競馬が開催されていたが、1928（昭和3）年に正式に八王子競馬場が開設。1934（昭和9）年、高倉（現在の八王子東高校付近）に移転し、1949（昭和24）年に閉鎖された。

❹日枝神社

八王子市街を一望できる高台に鎮座し、江戸期より甲州往還の人びとの参詣が多かったといわれる。祭神は大山咋神（おおやまくいのかみ）。「山王さま」と呼ばれ、大和田村の人びとに崇敬されてきた。現在の社殿は1975（昭和50）年に造営。

⑤東光寺

かつて南多摩郡小宮村の村役場が置かれていた。寺の端には、大和田坂の坂上から移転した高幡山の初不動詣でをする人びとの道標となった高幡山不動碑や庚申青面金剛寺の碑、三界萬霊塔の三基の碑が並んでいる。

⑥大和田市民センター

大正期、地元の人が寄付したこの土地に小宮村役場が移転。1938（昭和13）年に小宮町役場新庁舎が完成し、合併後は小宮出張所となった。以前は八王子市水道局も置かれ、1983（昭和58）年に市内初の市民センターとして開設。

⑦大和田橋

江戸時代、夏は飛び石伝いで歩き、冬は板橋を仮設して浅川を渡ったという。1905（明治38）年に木造橋が架けられ、1927（昭和2）年に鉄筋コンクリート橋になった。八王子空襲の際の焼夷弾の跡が残されている。

⑧八王子郵便局

1872（明治5）年に八王子郵便取扱所として横山町に開設。旭町の八王子駅前に移転したのち、1977（昭和52）年に現在地に移転。市内郵便物集配の中心局としての役割を担ってきた。

⑨浅川橋

国道16号が浅川を渡る橋で、中野上町と大横町を結んでいる。1901（明治34）年に架けられた木造の橋が1930（昭和5）年に架け替えられ、その後1963（昭和38）年に現在の橋となった。長さ117m、幅24m。

⑩暁橋

暁町と元横山町を結ぶ橋。1923（大正12）年に木造の橋が架けられた。元横山町側の橋のたもとに「暁橋架設費寄附芳名碑」「暁橋の碑」が立っている。1960（昭和35）年にコンクリート製の橋に架け替えられた。長さ122・6m、幅6m。

⑪名綱神社

かつて名綱三郎の館跡があった場所に建てられたといわれる。正面左側の鳥居をくぐると祠がある。右側の階段の左右には石灯篭が並び、奥に理髪業の神様「業祖采女霊神」の碑と「采女霊神祭祀五十周年記念碑」が並んでいる。

⑫水原秋桜子句碑

戦災で自宅を失った俳人の水原秋桜子は八王子に疎開し、約10年間を過ごした。「馬酔木」同人の私邸に建立していた碑を2006（平成18）年に名綱神社に移転。「冬菊をまとふはおのがひかりのみ」と刻まれている。

⑬大善寺

1961（昭和36）年、現在の大横町より移転。市内最古の梵鐘がある。移転前は2万坪の寺域を誇り、毎年10月に賑わうお十夜は特に有名だった。2012（平成24）年より現在地でもお十夜を開催している。（はちとぴ32号参照）

⑭機守神社

江戸時代、夢で白滝姫に会い機織の秘法を授かった者が祠を建て、機守（はたがみ）神社として、朝夕崇拝したといわれる。以来、織物業関係者に信仰されてきた。大善寺移転の際に取り壊されたが、1982（昭和57）年に現在地に遷座された。

⑮龍谷寺

近くの弁天池に棲む「龍」と、地元の地名の大谷の「谷」から名付けられたといわれる。現在の本堂は1977（昭和52）年建造。堂内には江戸時代の諸仏像がある。日輪天王と月輪天王を守護神として祀っており、隣接して日月神社がある。

⑯東海大学八王子病院

2002（平成14）年開設。正式名称は「東海大学医学部付属八王子病院」。地域の中核病院の役割を担い、診療科30科、病床数500を誇る。院内にはさまざまな施設があるほか、ドクターヘリが離発着できるヘリポートを備えている。

ひと休みコラム

小宮公園

小宮公園は1986（昭和61）年、標高約160mの加住丘陵に開園しました。

小宮公園の特徴といえば、何より自然の豊かさが挙げられます。総面積約25haの大部分を占めるのはクヌギやコナラなどの雑木林です。これはもともと自然にできたものではなく、人間が自然に働きかけ、長い間利用しながらつくりあげてきた、いわゆる「二次林」です。公園では現在も人の手を加えながらの里山管理を行っているため、美しい雑木林が残されています。

園内には古い枕木を利用したいくつかのルートが木道として整備されていて、歩いて散策することができます。特に新緑の季節が一番人気ですが、1年を通して花が絶えることはなく、そこかしこで四季折々の花を楽しめます。また、70種を超える野鳥も観察されていて、バードウォッチングも非常に盛んです。

公園の中央付近には谷地川の支流、大谷川の水源があります。かつてこの辺りには水田が開かれ、近年まで稲作が行われていました。この流れが行き着く公園の南東角にあるのが、大谷弁天池。天明年間の飢饉のころ、八王子千人同心頭の荻原氏が水田灌漑確保のために溜池を掘り、そこに弁財天と祀ったといわれています。2008（平成20）年に現在の赤い社殿が建てられました。

公園の北側、園内最高所のひよどり山に広がるのは、開放感いっぱいの草地広場です。ここは多摩動物園の草食動物のための牧草地でもありました。南には、子どもに人気のすべり台やターザンロープなどで遊べる遊具広場があります。また、小宮公園サービスセンター（雑木林ホール）ではさまざまな自然情報が展示されていて、園にまつわる情報を入手できます。

自然解説やボランティアによる野鳥・野草観察会も行われるなど、年間を通して各種イベントが開催されているのも小宮公園の特徴です。多くの人の手が加わりながら、小宮地域に残る大切な自然を守り育てている、そんなあたたかな公園なのです。

◀小宮公園サービスセンター

▲大谷弁財天

◀木道

●お問い合わせ
小宮公園サービスセンター
暁町2-41-6
☎（623）1615

元気印の市民団体紹介

応援します市民力。

市内で活躍する元気な団体・サークル・同好会を紹介するコーナーです。
活動内容やイベント情報など、編集部までお知らせください。

八大緑遊会

◆定例活動日：毎月第２水曜、第４土曜日他
◆活 動 時 間：10:00～15:00
◆年　会　費：1000円
◆問い合わせ：(649) 8021（奥村）

多様な自然を育み、遊ぶ

「八大緑遊会」は、東京都が開催していた「環境学習リーダー養成講座」の卒業生が集い、２０００年に結成されました。発足当初の活動場所は加住丘陵の端の大谷緑地だけでしたが、現在では都内７か所の緑地保全活動に携わっています。会員数は40名で、多くは八王子市民ですが、中には都心からやって来る方も。会の名前に「遊」の文字が使われていることからも分かるように、「自然大好き、人間大好き、遊び心を忘れずに！」をスローガンとしています。

現在は大谷緑地などで、毎月５回の定例活動をしています。「かつて辺りには田畑や谷戸があって、農家の人たちはこの緑地で木を切り、薪炭にしたりしていたんです」と語るのは、近くに住む会長の奥村司さん。「ただ、木材燃料を使わなくなると、木を切らなくなり、荒れてしまったんです。私たちはもともとあった里山を残す活動をしているんですよ」と続けます。

広さが３・１haある大谷緑地で、会が主にかかわっているのは、広葉樹の幹を切り、その切り株から伸びる芽を育て、15～20年の周期で再び伐採する萌芽更新という活動です。ほかにも間伐や下草刈りなど、自然を相手にした作業は枚挙に暇がなく、年間を通して緑地保全活動はエンドレスに続きます。そのため後継者の育成や会員のレベルアップは必須。奥村さんは「自然に興味のある方は、ぜひ私たちと一緒に参加してください」と呼びかけています。

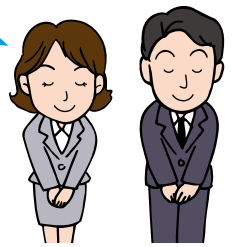
会では、定例会に加えて、企業や学校との共同作業も積極的に受け入れたり、「雑木林探検隊」などの自然観察イベントも手がけています。遊び心を忘れずに、大谷緑地の魅力を伝え続けている会に、あなたも参加してみませんか。

▲活動に取り組む皆さん

はちとぴサポーターの会　会計報告

145,220円（2018年12月11日～2019年12月10日）

心よりお礼申し上げます。
引き続きよろしくお願いします。



はちとぴ32号にて「はちとぴサポーターの会」を立ち上げ、読者の皆さまに広くご寄付をお願いしました。その結果、非常に多くの方々より温かいご支援を賜りました。厚く御礼申し上げますとともに、上記の通り会計報告いたします。賜りました浄財をもとに今後とも魅力的な誌面づくりに努めます。

振込先【はちとぴサポーターの会】
ゆうちょ銀行　口座番号 00110-4-0514170
※お問い合わせは【揺籃社→☎042-620-2615】

一口 1,000円
随時受付

※年１回、誌上にて会計報告します
※収集した個人情報は無断使用いたしません

はちとぴサポーター特典！ ご寄付いただいた方には自宅まで郵送します

八王子の民俗誌 10

八王子地域社会研究会 代表　佐藤　広

大善寺～豊かな歴史を新たな地で活かす

かつて大善寺といえば「お十夜」である。「お十夜を過ぎると寒くなってくる」と話す方に出合ったことがある。お十夜が、年中行事として暮らしの中に根付いていた。

大善寺は天正年間に滝山城下に創建され、城主の北条氏照が八王子城に城を移して寺も移転する。八王子城は豊臣方に攻められ、天正18年（1590）に落城、町が八王子宿に移転して寺も移った。寛永3年（1626）の梵鐘（市指定有形文化財）は、横川（横川町）の鋳物師、加藤甚右衛門の作品である。この鐘の銘文から八王子が横山と呼ばれ、当初は町奉行・町年寄の支配（寛永の頃から代官支配）であったこともわかり、八王子市の史料として貴重である。

お十夜は十夜といい、元々は十日十夜の間行われる浄土宗寺院の法会である。大善寺の十夜は八王子城落城の戦死者慰霊としてはじめられたと伝わり、鎌倉の光明寺の流れを汲みながら、独自の方式で「諷誦文（ふじゅもん）（死者の追善供養のために経文などを読むこと、あるいはその文のこと）十夜」として、毎年10月13日から15日の3日間行われた。葬式のあった人は位牌をもってお十夜に詣で、念仏を唱和すると死者と再会できるとの伝承があった。かつては大善寺流の双盤念仏が各地に普及した。木枠に吊り下げた大きな鉦と太鼓を打ち鳴らして念仏を唱える。市内の大船、寺田、上柚木、中山の人々や、高月町・小門町の寺院などでも行われていたと聞く。お十夜では、江戸時代から曲馬・力持ちなどの見世物興行が行われ、多くの人々を惹きつけた都市的な娯楽の場でもあった。

この大善寺は子育ての呑龍上人の信仰、機屋や織子たちの機守様（はたがみさま）への信仰でも著名で、八王子の発展とともにあった。

大横町の大善寺・極楽寺界隈は八王子空襲で焼け残り、江戸時代の雰囲気を残す貴重な空間であったが、市の方針で寺は大和田町に移転、その後現在の大谷町に移った。平成24年（2012）からお十夜は再興され、令和元年（2019）は11月2日に法要と共に様々なイベントが行われた。

4度の移転を経た大善寺。寺はもとより多くの方々が、新たな地で歴史を活かした地域創造に努力されている。まちづくりの観点からも頼もしいことである。

▲機守神社と大善寺本堂

八王子の原風景 10

元・八王子市市史編さん研究協力員　馬場喜信

谷地川流域を訪ねて　1

JR八高線で北へ、二つめの小宮駅に降り立つと、市街地からわずかに離れただけなのにあたりには静寂の気配が漂い、ちょっとした旅先に着いたような気分になる。さっき渡ってきたばかりの谷地川の流域にやってきたのだ。ここは市域の大半を占める浅川の流域とは別個の世界で、川の源流は加住丘陵と呼ばれる尾根が二派に分かれるところに発し、西から東へ細く長い流路を描いて直接に多摩川へ注いでゆく。古くから人々のさまざま営みが生まれ、育まれて、その痕跡が今日まで確かな姿として伝えられている。江戸期の地誌を手懸かりに探訪に出かけよう。まずは丹木の御岳神社へ。

「蔵王権現社　社地七間に廿間程、近郷九ヶ村の鎮守なり、本社二間に三間、拝殿二間に四間、東向、前に鳥居あり、神体は木像にて長八尺あまり、社内に随神二躯あり、立像にて長三尺余り、背後に康永二癸未年（1343）正月十八日造立とあり、又末社の像を伝へて三十八躯あり、各手足損して全体なるはなし、例祭年々二月社日八月十三日なり、古へこの社地高月村にありしが、北条氏照瀧山の城をきづきしとき今の地に移したるとなり、按ずるに其頃の別当は修験なりしにや、宮本坊専国坊などの住せし跡と云う処あり」

「別当金蔵寺　社の側にあり、天台宗、高月村圓通寺の末寺、金峰山金剛寺と号す、開山つまびらかならず、本尊釈迦木の坐像、長二尺余、本堂八間に六間、南向なり」（『風土記稿』）

「蔵王堂　城山に接し、山上へ登り四、五十間あり。北条氏在城の頃は、この地は城中より続きて東南北は峻崖ゆえ頂上に矢倉を設けたる跡ありと云う。山上の平地は凡そ廿間に十五間許もあるべし。ここに本社、拝殿、鳥居、神楽堂あり。例祭二月社日、八月十二日。近郷の修験集まりて、柴燈、護摩修行せり。別当金蔵寺。本尊蔵王権現木立像。八尺許。末社なる八神祠の本尊は、みなこの蔵王堂に安ず。その長さ二、三尺より四尺程なり、近里の内に社祠ありけるが、乱世後は廃祠となりしゆえ、この本社に安ぜしことなるべし。木像悉く破壊して数多あれど、わかちがたし。」（『武蔵名勝図会』）

よくぞこれだけ詳細な記録を書き記しておいてくれたものぞ。両書が記している多くの神像彫刻は、2000年3月に探訪した時、このままの姿で堂内に鎮まっていた。現在は丘麓の収蔵庫に安置されているようだ。

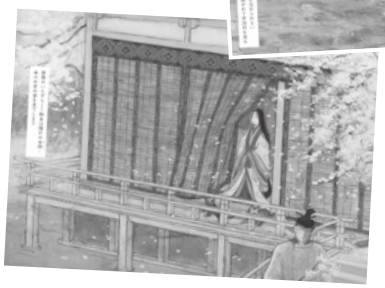
▲丹木の御岳神社　2000年３月11日

私の本はこうして生まれた

其の四十四

『哀しみの女君たち ――『源氏物語』のヒロイン・二十四抄――』 豊田芳子 著

いまから千年以上も前に執筆された『源氏物語』。本書は紫式部が登場させた多くのヒロインの中から主だった24人の女君を取り上げています。『源氏物語』を読み解く市民講座を長く受け持ってきた筆者は、哀しみのうちに生きざるを得ない女君たちの来し方行く末を丹念にあぶり出します。平安時代のしきたりに隔世の感を覚えつつ、一方でどの時代も変わらない人間の性（さが）に惹かれていくことでしょう。登場人物の動きがよく理解できる付録の系図、年立などもありがたい入門書です。



『源氏物語』の講読会を始めて、今年でちょうど20年になります。間もなく『源氏物語』全五十四帖を読み終えるクラスもありますが、そうして読み重ねていっていつも思うのは、『源氏物語』に登場する女君たちってみんな可哀想だなぁ、ということでした。

折から、私が所属しております八王子の短歌結社「短歌草原社」の月刊歌誌『短歌草原』に、その思いを綴る機会を与えていただき、2013年6月から3年半に渡り、『源氏物語』の女君たち24人の諸相を『哀しみの女君たち』と題して連載いたしました。それをこの度、多くの方々のお力添えを頂いて、こうして1冊の本にまとめることができました。

『源氏物語』は平安時代の上流貴族社会を舞台に書かれていますので、ヒロインたちの多くは一般庶民からすると、雲の上の存在のような女性たちです。主人公光源氏の正妻「葵の上」などは、そうしたセレブの典型といえましょうが、夫婦仲は冷えきっており、しかも26歳の若さで亡くなってしまいます。また、絶世の美女というのも、第三者から見ればこの上なく羨ましい話ですが、類まれな美貌に恵まれた「紫の上」が幸せか、というと、そうでもありません。セレブでも、美人でも、幸せにはなれず、それぞれの哀しみを背負って生きていかねばならなかったのが『源氏物語』の女君たちです。

王朝上流貴族の女性たちの行動範囲はとても狭く、生涯の殆どを自分の住む邸内で過ごしています。そもそも身内でもない男性に顔を見られることさえタブーでした。「垣間見」といって、男性がそっと覗き見をしている場面が度々出てきますが、今とは違い、見た側の男性ではなく、見られた女性側に非があるとされていました。それに現在の格差社会など問題にもならないほど身分差別も甚だしく、とても生きにくい時代だったと思います。

『源氏物語』の時代から千年を経た今、科学技術は著しく進歩し、女性も自由に生きていけるようになっています。でも、変わらないのが人の心です。本書は学術書ではなく、気軽にお読みいただける内容ですので、『源氏物語』へのアプローチのきっかけとなれば幸いです。（著者記）

『哀しみの女君たち ――『源氏物語』のヒロイン・二十四抄――』
定価2000円＋税　揺籃社刊
A5判・256P（1月刊行予定）
※本書をお求めの際は、お近くの書店か当誌編集部までどうぞ。